

単位認定・少人数ゼミ形式

2016年度
全体ガイダンス

4/5
TUE.

16:45~
18:00
会場：D101

教養研究センター設置科目



いま、最先端の学問は
「教養」かもしれない。





のすゝめ

大学は専門教育と教養教育の両輪で成り立ちます。

なぜなら、複雑な現実社会の中で専門的知識はそのまま役だつものではないからです。

専門的知識は応用しないと、現実には、はまりません。

応用するために必要なもの。

それが教養です。

さらに専門教育は限られた一分野に徹するから専門。

世の中を生きていくためには専門だけでは偏ります。

そこでも教養は不可欠なのです。

福澤諭吉先生も言っています。

「決して字を読むことのみを勧むるに非ず」

『学問のすゝめ』の中の言葉です。書齋で狭い学問をしているだけでは駄目だということです。

社会的・実践的に、からだを動かして学ぶことまで含めた、広い学問の必要性を述べた言葉です。

福澤先生による「教養のすゝめ」と解してよいでしょう。

教養研究センターは慶應義塾における教養教育の力強い担い手です。

様々な授業を設置して、学部のにしきりにとらわれない、教養教育の実践に取り組んでいます。

ぜひ、全体ガイダンスに参加いただき、履修の参考にいただければと思います。

担当教員からのメッセージ

■ アカデミック・スキルズⅡ Academic Skills

法学部教授 片山杜秀



**レポートと論文の違い。
プレゼンテーションの仕方を基本から学びます。**

論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を徹底指導。減多にない授業です。大学の授業ではレポートを書く機会が増えます。3、4年生になると論文の執筆を求められることもあるでしょう。では、レポートと論文はどう違うのか。さらに内容を口頭で発表するときはどうするか。アカデミック・スキルズはそのスキルをみなさんに伝授します。

■ 身体知 Learning through Affective Experience

法学部教授 武藤浩史



**身体ワークショップを活用した、
頭と体の両方を刺激する創造的な授業。**

芸術作品を軸とし、講義と議論に体感型のワークショップを組み合わせた、創造力と協働力を刺激する授業です。夏の一週間に集中し、通信教育課程と通学課程の面白い学生が集って、大いに盛り上がり、自分でも知らない自分を発見します。

■ 生命の教養学 Lecture Series on Life

文学部准教授 赤江雄一



**「生命」をめぐる各界の第一線で活躍する講師が登場。
最先端の議論に触れて「生きる」ことへの認識を深めませんか。**

それぞれの分野で取り組んでこられた十余名の講師が登場し、ご自身が積み重ねてこられた研究や実践を読み解く濃密な講義を1回ずつしていただきます。「生命」をめぐる照らし出される豊饒な知の地平を一緒に見渡しましょう。質疑応答の時間がたっぷりとりられていて毎回盛り上がります。積極的に質問をしてください。

■ 身体知・映像Ⅱ interpreting and Making Narrative Films

法学部准教授 佐藤元状



**映画制作を中心に据えた
慶應義塾大学唯一のユニークな授業です。**

本授業では、学生、教員、ティーチング・アシスタント、ゲスト講師と、参加者全員で力を合わせて、年度末に一つの映画作品を作り上げます。この目標に向かって、演技、撮影、編集、脚本、監督など、映画制作のすべての仕事をオールラウンドにこなしていきます。

■ 身体知・音楽Ⅱ ■ 身体知・音楽ⅢⅣ historical performance practice of Music

経済学部教授 石井明



**歴史的音楽（器楽・声楽）を、
当時の演奏習慣に基づき演奏していきます。**

音楽は、身体を介し表現され、歴史の中で常に、人間の知的な活動と連携してきました。この授業では、音楽を身体で表現することを通じて、歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から見つめ直すことを目的としています。

アカデミック・スキルズⅡ

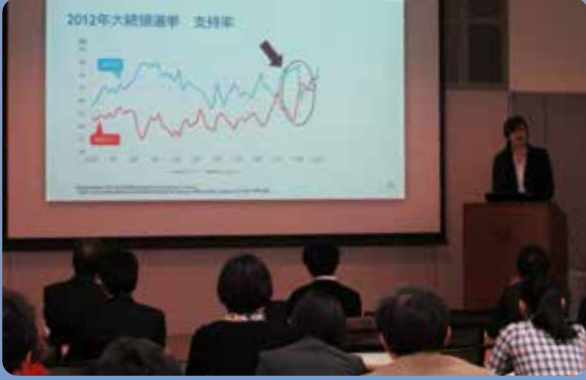
知の基礎を築く



大学では「自ら考え、調べ、論ずること」が求められます。これは学問研究の出発点であると共に、長い人生を送る上で不可欠な「教養」という知的基礎体力を身につけるための基盤でもあります。

そこでこの「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけることがこの授業の目的です。多分野にまたがる複数の教員が担当しており、学生の自主性を尊重し、学生の知的関心を活性化させるための授業が展開されています。少人数セミナー形式の授業で、現在はアカデミック・スキルズⅡ 4クラスで設置され、7学部の学生で約80名が履修しています。年度末には、各クラスのメンバーが参加して、論文とプレゼンテーションのコンペティションが実施されています。

佐藤望(編著)・湯川武・横山千晶・近藤明彦「アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門 第2版」(慶應義塾大学出版会、2012)



授業の特長

- 学部共通科目で少人数制
色々な学部、学年の学生との出会いや議論を通じて、多様な個性や価値観とふれあうことができます。
- 1クラス3名(原則)の教員が担当
複数の先生と接することで、複眼的思考や多様な解決手法を学ぶことができます。
- 1年のまとめの論文を「アカデミック・スキルズ学生論文集」として刊行
これまでに刊行された論文集は図書室で閲覧することができます。



慶應義塾大学日吉キャンパス学習相談員「学生による学生ののためのダメレポート脱出法」(慶應義塾大学出版会、2014)

授業紹介

論文を書き、発表する。
全ての過程を系統立てて学んでいきます。

論文を書くためにはどうするか。テーマの選び方・絞り方。図書館やネット上での情報の探し方。論の立て方・進め方。結論の出し方。さらにそれを口頭でスライドを付けて大勢の前で発表するためには？それらのスキルを順々に系統立てて学んでいきます。大学で学問するためにも、社会に出てからも、末永く役立つ内容です。授業は少人数セミナーのスタイルをとります。塾生20名に対して教員3名というのが基本です。通年で履修してもらい、春学期にはまず4000字の論文を作成します。そして秋学期には、より本格的な8000字の論文を作成し、仕上がった論文をさらに口頭で発表する訓練を行います。年度末には各クラスから最優秀の論文と発表者が選抜され、2月に開催される大きなイベント、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションに参加してもらいます。この厳しくも楽しいコンペティションで、1年の幕がおります。



論文コンペティション入賞作

- | | | | |
|------------|-------------------------------------|-----------|---------------------------------|
| 文学部
1年 | 詩人・寺山修司の試み歌
「かなしみ」の解釈を通して | 文学部
1年 | 西行における不在の在
『御裳濯河歌合』に見る月歌を通して |
| 理工学部
1年 | 身体の拡張により生じる身体の多様性
—要介護高齢者の自立に向けて | 法学部
2年 | 女性の政治進出と隠された政治関心 |
| 経済学部
2年 | 妖怪ウォッチは
長寿アニメ作品になり得るか | 法学部
4年 | 「中華民族多元一体構造論」と
中国政府による利用 |

プレゼンテーション・コンペティション入賞作

- | | | | |
|------------|--|------------|-------------------------------------|
| 経済学部
2年 | 坂の内包する宗教観
—東京を事例として— | 商学部
2年 | 日本農業を新3Kへ
—グリーンツーリズムを通してみた農業の展望— |
| 経済学部
2年 | 大学生になってもポケモン!?
—なぜポケットモンスターは大ヒットしたのか— | 法学部
1年 | TDR 栄光の「ショー」の喪失 |
| 法学部
2年 | クールジャパンは、どのように動かすべきか | 理工学部
2年 | 優等列車の停車駅選定条件の研究 |

Voice of Student

きちんとフィードバックをもとに
より洗練した論文を書けるようになりました。

商学部2年
(2015年度受講生)

今までも論理的なレポートを書くよう努めてはいましたが、アカデミックなレポートになっているかが不安に思っていたりしたので受講しました。ここは、独りよがりにならず、きちんとフィードバックをもとに書き進めていけることが魅力です。論文の構成に悩んでいたとき、担当の先生や同じグループの人のアドバイスで一気に展望が開けたことがありましたし、自分が正しいと思い込んでいたことが、誤りであることを知ることでも多々ありました。資料の扱いも、一次資料と二次資料の考え方など、今まで正確に理解していなかったことに気づけたり、より洗練した論文を書くことができるようになったと思います。受講して、一番大きく変わったことは論文の方向性についてだと感じます。今までは関心があることをただ文にしているという印象でしたが、学問的にいかなる意義があるか、いかに一般化できているかを意識しながら書き進めていくようになりました。

身体知

創造的コミュニケーションと言語力



参加型・体験型の授業を通して、知力と身体感覚が相互に磨かれ、大学の授業で重要な言語的コミュニケーション力と社会の先導者として必要な非言語的コミュニケーション力の双方が育まれる科目です。

題材については主として芸術作品を活用し、方法については主に芸術系と臨床心理学系ワークショップを参考にします。言語力育成も試み、「座学」中心の授業では育むことのできない身体知という不足部分を補い、大学教育の質の向上を目指します。

単に「講義を聴く」のではなく、自分が主体的に授業に参加し、体験することを通じて、新たな発見、刺激、感動などを得ることができるユニークな授業です。



武藤浩史『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』（筑摩書房、2010）



授業の特長

参加型・体験型

主体的に授業に参加し、体験することを通じて、新たな発見、刺激、感動などを得ることができます。

夏休み集中講座

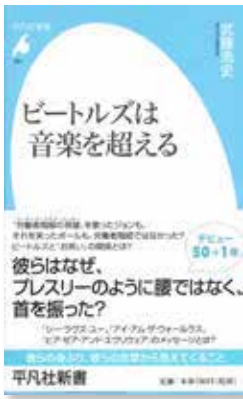
夏休休業中、1週間の集中授業。
1日2～3コマの密度の高い授業です。



授業紹介

2014年度につづき、ビートルズをテーマに、8月12日から17日まで集中的に、身体ワークショップを活用して、様々な気づきと表現を学びます。

- | | | |
|-----|-------|---|
| 第1日 | 8月12日 | [第3限] イントロダクション1
[第4限] イントロダクション2 |
| 第2日 | 8月13日 | [第3限] 講義と議論1
[第4限] 講義と議論2 |
| 第3日 | 8月14日 | [第3限] 講義と議論の振り返り
[第4限] 身体ワークショップ1（「ていねいに生きる」ほか） |
| 第4日 | 8月15日 | [第3限] 身体ワークショップ2（「イエロウサブマリン体操」ほか）
[第4限] 身体ワークショップ3（準備的な創作体験） |
| 第5日 | 8月16日 | [第3限] 創作の準備1
[第4限] 創作の準備2 |
| 第6日 | 8月17日 | [第3限] 創作発表会1
[第4限] 創作発表会2
[第5限] 創作発表会3
[第6限] 創作発表会4と全体振り返り |
- (予定)



武藤浩史
「ビートルズは音楽を超える」
(平凡社新書、2013)

近年のテーマ

2012・2013・2014年度 ビートルズを読み解く

ビートルズの「音楽」の世界を、文学として読み解くことで、込められた世界観を新たな側面から解釈していきました。音楽と歌詞にとどまらず、詩や絵、写真、インタビューでの彼らの言葉、映画、パフォーマンスなど、様々な観点からビートルズを生み出した時代性にも迫りました。身体ワークショップによる、新たな表現も平行して行いました。最終的に成果発表会を行い、ビートルズから学んだ「自由」を表現しました。

2015年度 声と記憶

ジェイムズ・ジョイスなどの記憶にかかわる文学作品を「読む」・「声に出す」作業を行ったのちに、「語る」・「聴く」・「からだで表現する」・「からだで受け止める」といういくつかの段階を経て、ともに読んだ作品を通して、他者の体験を聴き、創作につなげ、最終的に身体表現へと導く授業を展開しました。

Voice of Student

表現するさまざまなアプローチを学ぶ 幅広い人へのコミュニケーション力がつきました。

法学部2年
(2015年度受講生)

学んだことを実践する機会はなかなかありませんが、この授業で実践することで、プレゼンテーション能力の向上にもつながると考えて受講しました。この授業では、「表現する」という目標に向かって、さまざまなアプローチを実践出来ます。「ブラインドワーク」をはじめ、英文の朗読、アクティブリスニング、絵画の発表など、そのすべてが印象に残っています。中でも、心に残る名文に出会えたことが良かったです。Steven Millhauser氏の「Getting Closer」は今でも時折思い出します。さらに集中的なワークショップ形式で、受講者が多様なことも貴重。通学過程と通信教育課程の学生がコミュニケーションを取る授業スタイルも興味深かったです。授業を経て変わった事は、アクティブリスニングを実践したり、朗読にじっくり取り組んだことによって、異なる年代、性別の人とも怖じけず交流することができるようになりました。このことは社会人になっても、家族生活にも大きく影響すると思います。

生命の教養学

「飼う」



2015年5月8日 野口和行氏

この授業は「生命とは何か、〈生きる〉とはどういうことなのか」という問いから始まる知的探究への誘いとして構想されています。「生命」については、生物学を中心に主に自然科学に属する諸分野が「生命科学」として研究を進めています。しかし、哲学・文学・歴史学・文化人類学などの人文学、そして経済学や政治学といった社会科学も、もちろんそれぞれに異なる角度からこの問いにかかわっています。

一面的に捉えるのにはもともと適していないこのような問い・対象を見定めるためには何が必要か。それは、特定の学問領域に偏ることなく思考の材料を広く求め、とはいえ各領域の研究成果には充分な敬意を払い、そこから獲得された雑多な材料をもとに新たな知の組織を工夫しようとする態度です。これを「教養」と呼ぶならば、それをみなさんが涵養するための材料と場を提供するのが「生命の教養学」の授業です。

高桑和巳(編)「新生 生命の教養学X」(慶應義塾大学出版会、2014)



高桑和巳(編)「性 生命の教養学11」(慶應義塾大学出版会、2015)

授業の特長

多彩な分野を代表する講師たちによって おこなわれるオムニバス授業

自然科学、社会科学、人文学など、多彩な分野のそれぞれ最先端で活躍している講師が週替わりで登壇し、濃厚な講義をおこないます。各講義では原則として1時間程度の講義後、自由な質疑の時間が設けられます。学期の最初と最後には、コーディネイターによるオリエンテーションと総括がおこなわれます。



2014年7月4日 長沖暁子氏

授業紹介

本年度のテーマは「飼う」。
動物と人のかかわりの深みに迫ります。

2016年度のテーマは「飼う」です。一般的に「飼う」とは、人が食べ物を与えて動物を養育育てることです。人間は、野生の動物を飼って、可能な場合は家畜化し、食糧として、毛皮として、実験動物として、牧羊犬のように他の動物を飼うための相棒として、愛玩動物(ペット)として、そして他にもさまざまなたちで活用することで自らの「生命」と生活を支えてきました。

「飼う」という概念は元の意味から拡張しても考えられます。例えば、動物が他の生物を時には自らの体内に「飼う」ことがあります。また人間が人間を「飼う」ことも、「社畜」という比喩や「奴隷」を思い浮かべればイメージできるでしょう。「飼う」を考えるのは権力や支配の問題に必然的に向き合うことでもあります。「飼う」というプリズムを通して一緒に「生命の教養学」に取り組んでみませんか？



2015年6月26日 大道寺慶子氏

ペットがもたらすコンパニオンシップ

濱野佐子(帝京科学大学こども学部児童教育学科准教授)

ペットを飼うこと、地域猫と殺処分をめぐる現状

齊藤朋子(mocoどうぶつ病院院長)

馬と人間の歴史

光田達矢(本学経済学部専任講師)

ちょうざめの養殖

平岡潔(株式会社フジキン つくば先端事業所新製品開発部)

動物実験と実験動物

下田耕治(本学医学部准教授)

飼うことの倫理学

奈良雅俊(本学文学部教授)

ナチズムにおける支配の快楽をめぐる

田野大輔(甲南大学文学部教授)

現代における人身売買と日本

原由利子(反差別国際運動(IMADR)事務局長)

ローマの奴隷制

大谷哲(独立行政法人日本学術振興会特別研究員)

※予定、敬称略。肩書きは2016年1月現在

過去の開催一覧

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 2015年度 ● 「食べる」 | 2010年度 ● 「異形」をめぐる理系と文系の対話 |
| 2014年度 ● 「性」 | 2009年度 ● 「ゆとり」 |
| 2013年度 ● 「新生」 | 2008年度 ● 生き延びること ― 生死の後へ |
| 2012年度 ● 「成長」 | 2007年度 ● 誕生と死 ― その間にいる君たちへ |
| 2011年度 ● 「共生」をめぐる理系と文系の対話 | 2006年度 ● 生命を見る・観る・診る |

Voice of Student

一つの事象を多角的に深める 分野横断の学びの楽しさが、ここに。

商学部1年
(2015年度受講生)

オムニバス形式で、さまざまな方面で活躍されている研究者の方から、多角的な視座で講義を受けられることが魅力です。学習内容をインプットするだけでなく、関連付けて捉え直すことができます。2015年度の「食べる」というテーマにしても、グローバリゼーション、農業の現状、発酵食品、スローフード、肥満、エネルギーバランスなど、多彩な側面からのアプローチで、複眼的に、深く問題を考えることができました。

大学での教養科目の意義は「得た知識を関連させ、昇華させることで学問の楽しさに出会う」といわれますが、この連続講義を通じて、一つのテーマでも、ここまで多くの視点から思考を深められるのかと驚いたと同時に、回を重ねるにつれ蓄積された知識を活かして聴講できるようになりました。他の一般教養科目とも共通する学びを実感でき、分野横断の学びの楽しさに触れられました。

身体知・映像ⅠⅡ

物語映画を読む、創る



本授業の目的は、映像作品の創作を通じた「新しい言語能力」の習得です。新しい言語能力とは何か。文学作品を映像化するためには、まず物語の構造を読み解き（批評）、文字で表現されている物語を動きや発話に変換しなければなりません（脚本）。さらに、映像が観客に美的体験として届けられるためには、物語を実際に身体で表現し（演技）、映像言語を駆使した視覚表現として統合していく（撮影・編集）必要があります。ひとつの物語を、言葉、身体、視覚という異なる形式へ変換していくこと、それを、他の受講者とのコミュニケーションを通じて具体化していくこと。この過程のなかで、事物の複雑なありようを捉え、他者への想像力を働かせる、研ぎすまされた言語能力が身についていくはずで



授業の特長

映像制作の経験は問いません

経験の有無を問わず誰もが持っている映像言語を掘り起こし、表現できるようになるプログラムです。

言語、身体、視覚など、多様な表現にチャレンジします

撮影や映像編集だけではなく、小説の読み解きやエチュードによる脚本づくりなど、様々な表現のレッスンをを行います。



受講者同士のコミュニケーションを重視します

映像制作は、一人ではできません。受講者それぞれが自分の持ち味を活かした役割を担い、共同で制作を進めます。

第一線のアーティストを特別講師として招聘します

映像作家、脚本家など第一線のアーティストを招き、撮影手法や物語の構成など、専門的なレッスンをを行います。

授業紹介

映像制作を通じ、チームワークを学び、言語、身体、視覚をめぐる様々な表現に挑戦。

映画の制作を通じて、多様な言語能力の可能性を探る新たな授業です。映画や小説の読解、脚本制作や映像制作のワークショップを通じて、言語、身体、視覚をめぐる様々な表現に挑戦していきます。これまでレイモンド・カーヴァー「大聖堂」（2013年度）、アイザック・アシモフ「うそつき！（I、ロボット）」（2014年度）、ポール・ブロックス「A-Z」、「鏡」（2015年）の映像化に取り組みました。受講者のほとんどが映像制作は未経験であるにもかかわらず、完成作品はすべて、見応えのある優れた映画作品となりました。観客の心へ届く作品を作り上げるためには、物語構造の理解と映像言語の習得が不可欠ですが、この授業のなかで重要視しているのは、チームワークです。年度末に作り上げる映画作品には、映画制作に携わったすべての参加者の個性が刻印されることになるでしょう。これまでの自分の枠を超えた表現やコミュニケーションに取り組むことのできる、おすすめの授業です。



授業スケジュールの予定

春学期

オリジナルショートフィルムを制作

- 導入ワークショップ「1時間で作る即興映画」
- 映画のラピッドプロトタイピング：脚本、エチュード、撮影、編集
- 映画の鑑賞と批評
- 映画制作の基本：制作の流れと脚本の書き方
- 演習：オリジナル脚本制作
- 演習：撮影と編集
- 上映会

秋学期

短編小説を映画に

- 小説の読み解き
- ゲストアーティストの作品上映会
- 演習：小説を題材とした脚本制作
- 演習：テストショットと絵コンテ制作
- 演習：撮影と編集
- 上映会

Voice of Student

プロの方の指導と本格的機材で映像づくり 自分の意見を発表するハードルが下がった

文学部1年
(2015年度受講生)

もともと映像や映画に興味があり、プロの方の指導で様々なジャンルの作品を翻案して映像制作を行えることや、本格的な機材の使い方を学べる点などを知り、受講を決めました。印象に残っているのは、劇作家の松井周さんに教えて頂いた脚本の書き方です。単純そうに思えますが、いざ自分の脚本に生かそうとすると上手くいかず、物語を紡ぐことの難しさを実感しました。しかし、分かりやすく解説して頂いて、すみずみまで添削して頂けるので大変貴重な経験でした。脚本やカメラ撮影のプロの方が講師であり、本格的な機材を使用できる点など、この授業の強みは挙げだしたらきりがありませんが、個性的な友人と共に作品を制作できる面白さは他では得難いものです。一つの作品を作る過程において、自分の感性を表現することが求められますので、この授業を通して自分の意見を発表することへのハードルが下がったように感じます。

身体知・音楽ⅠⅡ

古楽器・合唱音楽を通じた歴史的音楽実践



写真提供：(公財)横浜市芸術文化振興財団

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直します。音楽演奏の実践体験によって、身体を通じた歴史・文化・言語の総合的な学習を行います。

器楽・声楽それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、耳と感性知識、身体を結びつけ、それによって身体を媒体として継承される歴史・文化・言語の連関を実際の体研によって学びます。学期末に、公開演奏会を学内・地域に開かれたかたちでその成果を披露します。

授業の特長

声楽アンサンブルと、器楽アンサンブルの2つの部門に分かれて行われます。

声楽アンサンブル部門

本格的なヴォイス・トレーニングを行い、古今の合唱音楽の実践を行います。それぞれが自律した演奏者として、他者の音とリズムを感じ、感覚を研ぎ澄ませて、音楽を作り上げていく授業です。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロなど、一般的に古楽器と呼ばれているバロック時代の楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の最大の特徴です。

授業紹介

声楽アンサンブル部門

ここで言う合唱音楽は、皆さんが高校などで体験してきたものよりもさらに一步上のレベルを目指しています。ときには、聞き慣れた混声4部合唱ではなく、6声、8声、ソロが加わったり、器楽アンサンブルが加わったりといった皆さんがこれまでに経験したことのないような、多彩なレパートリーも取り上げています。少人数のアンサンブルで重要なことは、一人一人の発する声が、それぞれ自律した音楽表現が可能になっていること、そして、それらが重なり合うことによって新しい音響の広がりを聞かせていくことです。それぞれの声の自律、音楽感覚の自律があって、美しい音楽を鳴り響かせることができるのです。そうした音楽創りを目指しています。そのためには、まず、しっかりと呼吸法、声の基礎トレーニングを行い、楽譜の伝えるメッセージを時代背景に注目しながら読み解き、それを音にしていきます。これを通じて、履修者の皆さんの音楽に対する意識・感覚が、新しいものとされていくでしょう。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロの他に、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・オーボエ、リコーダー、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、バロック時代に使われていた楽器を用いて、当時書かれた、トリオソナタなどの室内楽編成のための作品と、より大ききなアンサンブルであるバロック・オーケストラ(20人程度)のために書かれた音楽作品を取り上げ、バロック時代の音楽作品について深く理解していくことを行っています。実践を通じ、17・18世紀の作曲家たちが何を演奏者に、そして聴衆に求めていたのかということや、17・18世紀の器楽作品には、どのような音楽的メッセージが込められているのかということなどを、現代ではなく、当時使われていた楽器を用いることで探求していきます。なお、使用ピッチはa=415となります。一年を通じて、2回ほどの成果発表演奏会を、協生館藤原洋記念ホールで行う予定です。



この授業は、日吉音楽学研究室と連携して行っています。詳しくはホームページ <http://www.musicology.hc.keio.ac.jp/> をご覧ください。

Voice of Student

プロの演奏家の手法も学べる 古楽器を演奏する、貴重な経験も魅力

文学部4年
(2015年度受講生)

声楽アンサンブルを通じて音楽の歴史的・理論的理解を深めるという内容を見て、以前から習っていたピアノへの理解にも繋がると考え受講しました。秋学期の始めの頃のプロの演奏家の方々とのが合わせが印象的です。楽譜や歴史的・理論的な背景や、先生の要望に対して、日本に限らず世界で活躍されているプロの演奏家の方々が、どのような技術でこたえているのかを勉強する良い機会となりました。

授業の魅力は、古楽器とのアンサンブルやバロックの声楽アンサンブルの曲を演奏するという、普通の学生生活ではめったにできない経験ができる点です。自分が演奏しているときの音の聴き方が変わり、この講座を受ける前に習ってきたことの意味がわかってきたような気がします。具体的に言葉で表現できないので、ぜひ受けてみて、変化を体験してみてください。

ホールで発表する体験も貴重でした 古楽器から学んだ音そのものの美しさ

文学部3年
(2015年度受講生)

受講を決めたのは、音楽を実際に演奏することで作品の特徴を知りその魅力を体感することができると思ったからです。古楽アンサンブルの授業を選択していますが、何よりも第一の魅力は古楽器を用いて演奏できるということ。そして室内楽、あるいはオーケストラの曲を演奏する中で先生から曲の理解、表現方法について適切に指導して頂けることが魅力です。そして何より、実際に自分たちも、毎年2回、ホールで発表するという貴重な機会の中で、様々な学年の受講生とともに演奏をする貴重な場で、良き音楽仲間に出会えるのも大切な経験になりました。この講義を通じて、古楽器の演奏を通じて音の純度、音そのものの美しさについて気づくことができましたし、発表の場が多くコンサートにも多少場馴れすることができるようになり、集団で演奏する上で必要なコミュニケーションを意識しながら楽しめるようになったのが成長を実感するポイントです。

身体知・音楽ⅢⅣ

—— 発展声楽クラス ——

[2016年度 新設開講クラス]



身体知・音楽ⅢⅣは、身体知・音楽ⅠⅡの発展クラスであり、原則として身体知・音楽ⅠⅡを履修し単位取得した学生が履修できます。2016年度はまず声楽クラスを開講します。

声の訓練には、体の他の運動機能の開発と同様に、非常に長い道のりを要します。普段の発声において、十分に使い切っていない筋肉や器官を解放し、それらに新たな役割を与え働きかけることによって、人間の声は無限の可能性をもって変化していきます。さまざまな時代の音楽作品は、その表現に適したさまざまな質の声を要求してきます。その要求に応えることは、その作品の作曲家との、またその作品を生んだ時代との対話でもあります。

この授業では、個人レッスンの機会を増やすことによって、さらに発展した身体的訓練を行って、さらに豊かな発声・発語の力、アンサンブル能力、表現力を獲得することをめざします。

授業紹介

声と音楽を理解する — 呼吸、母音、子音、言葉とアーティキュレーション、声の音声学的理解、時代様式と声、アンサンブルの基礎、グループ・アンサンブルなどを、ローテーションを組みながら学んでいきます。個々に歌ったり、数人で合わせたりするような練習を重ねる中で、声の可能性を開発し、耳を訓練し、高度なアンサンブル能力を身につけていきます。また、発表演奏会は、身体知・音楽ⅠⅡクラスと共同で行います。（練習時間や演奏会のスケジュール等は、ガイダンスで確認してください）

Information

● 庄内セミナー 『庄内に学ぶ「生命（いのち）」—心と体と頭と—』



山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス(TTCK)を拠点として、生命をテーマにした教養セミナーです。学部生・大学院生・社会人が一緒になって対話と議論を中心に据えつつ、専門家や地元の方々の話、体験・体感型プログラムを組み合わせた4日間、自然豊かな庄内の地で精一杯「生命」について考え、語り、体感します。即身仏拝観、山伏体験、藩校・致道館での論語の素読体験、先端生命科学研究所ラボ見学など、過去・現在・未来が体の中を突き抜ける「学び」の場に立ち会ってください。

● 情報の教養学

現在の社会は、誰でもインターネットにつなげて、様々な情報を受発信できます。単純なネットサーフィンやメールから、SNSやブログ、銀行や株取引まで、形態も様々であり、利便性がどんどん向上しています。その反面、重要な情報が漏洩したり、知らずに自分のパソコンが悪者に踏み台にされたり、自分の発信した情報が思わぬ影響を与えたりするなど、リスクを伴います。インターネット利用者は、どのようなリスクが存在するかを知り、自衛する努力が必要です。2016年度春学期の「情報の教養学」では、インターネット利用による「情報のリスク」に焦点をあて、様々な分野の一流の講師に講演いただきます。

● 日吉学



日吉キャンパスの森には、1200種を超える虫や鳥や植物が賑やかに暮らしています。そして、巨大地下壕群をはじめ、アジア太平洋戦争末期にこの地が帝国海軍の秘密基地だったことを物語る、数々の遺跡があります。「日吉学」はこのような自然や歴史の遺産の宝庫である日吉キャンパスをフィールドにグループワークと討議を通して、自らの発見を学生同士で共有化し、考えをさらに深めまとめて発信する創造的な構成員を身に付ける教育プログラムです。家とキャンパスの往復だけでは飽き足らないキミ！日吉の秘境を一緒に探検しませんか！

● 学習相談

アカデミック・スキルズの修了生の有志が、相談員として学習に関するさまざまな相談を受け付けています。お気軽にどうぞ！

期間（予定）：春学期 2016年4月25日(月)～7月20日(水)
13:00～18:00
場所：図書館1Fスタディサポート



● 寄附講座

極東証券株式会社、住友生命保険相互会社、株式会社龍角散から教養研究センターに提供される資金を基に運営されている講座です。この支援によって実験的な授業を展開し、質の高い授業が正規化され、毎年着実に成果を重ねています。

※詳細はポスター、Web等でご確認ください。

ガイダンス Guidance

1 全体ガイダンス (教養研究センター設置科目ガイダンス)

4月5日(火) 時間 16:45~18:00 場所 日吉第4校舎1階独立館 D101教室

***履修希望者は全体ガイダンスに必ず出席してください。**

2 クラス別ガイダンス ※「身体知」以外は初回授業を兼ねています。

アカデミック・スキルズⅢ — 知の基礎を築く — 全4クラス

- 【火曜日2時限クラス】(英語版) … **4月12日(火)** 時間 10:45~ 場所 来往舎 シンポジウムスペース
【水曜日5時限クラス】…………… **4月13日(水)** 時間 16:30~ 場所 //
- 【木曜日5時限クラス】…………… **4月 7日(木)** 時間 16:30~ 場所 //
- 【金曜日5時限クラス】…………… **4月 8日(金)** 時間 16:30~ 場所 //

身体知 — 創造的コミュニケーションと言語力 —

- 【夏期集中講座】…………… **4月 5日(火)** 全体ガイダンスにて説明

生命の教養学 — 「飼う」 —

- 【金曜日3時限】…………… **4月 8日(金)** 時間 13:00~ 場所 来往舎 シンポジウムスペース

身体知・映像Ⅱ — 物語映画を読む、創る —

- 【月曜日5時限】…………… **4月11日(月)** 時間 16:30~ 場所 来往舎 シンポジウムスペース

身体知・音楽Ⅱ — 古楽器・合唱音楽を通じた歴史的音楽実践 —

- 【土曜日2時限】…………… **4月 9日(土)** 時間 10:45~ 場所 〈器楽〉独立館 地下2階DB203
〈声楽〉第8校舎 811教室

身体知・音楽ⅢⅣ — 発展声楽クラス —

- 【土曜日3時限】…………… **4月 9日(土)** 時間 13:00~ 場所 第8校舎 811教室

履修までの手続き



1) クラス別ガイダンス(初回授業)に出席し、その際に氏名登録した学生のみ「受講申込」の権利を与えます。ただし、定員超過の場合は選考を行います。

2) 選考結果発表で合格を確認した学生は、所属学部 of 履修案内に従って「履修申告」をしてください。(* 履修する授業を、どの科目名で履修するかおよび単位の認定は学部によって異なります。所属する学部の履修案内などでよく確認した上で履修申告してください。)